

この世界の果てにあるものはきっと良いものだ

白宮仙狐

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この物語は、世界のが誤った選択をし世界が滅ぶ。

そして、数億年後新たな世界が始まるがそこに待ち受ける物語は何なのか。

主人公の果てには良いことがあるのか…

注意：『最初の三作はプロローグなので展開は早いですご了承ください。本編は四作目の終盤から始まります。プロローグは興味のない方は見ない方が良いかも…でもプロローグを見たら話しの展開は面白く感じると思います。それに一話目は自分でも笑ってしまいました』

投稿ペースは週2〜3のペース投稿したいと思います…

## 目次

この世界は不条理だけどきつといいものだ	1
みんなに会うことはきつといいことだ	10
見誤りはだれにだってあるものだ	23
世界の終わりそして始まりは不条理だ	32
新世界にて二人は一人だ	41
船の中でも安心できない	50

この世界は不条理だけどきつといいものだ

ここは戦場、誰もが生きようと必死でもがき、戦っている。

そこにひとときわ目立つ小部隊がある、あれは極東第四師団である。極東とは誰もが聞いたことがあるだろう、あの小さな島国だ。

第四次世界大戦の引き金になった国家… 大日本神國、この国こそが世界大戦を引き起こした元凶の国… がしかし皆さんはこの名前を聞いてピンと来たと思うだろう。

この国はあの太平洋戦争を起こし、世界を狂わせた… それがきっかけか八百万の神々は神罰を下し、大日本神國はポツダム宣言を受諾した。

それから120年後、大日本神國は技術を高め復讐をしようとした。

そして、大日本神國は世界に宣戦布告した。

そして今に至るわけだ…

「全隊員次ぐ、旋回しつつ拡散相手を追い込め」

「了解!!。 団長はどうするんですか?」

「私は副団長と相手の本拠地に乗り込み、制圧する」

「了解」

ダツダツダ… と徐々に消えてゆく隊員達の足音、そして団長と副団長とマリだけが残った。

「さて団長、我々も行きましょう」

「そうだな副団長。おいマリ」

『ヴォーン』と音を立てて、マリが起動した。

「Yes、マスター。なんででしょうか？」

マリとは、自律型人工知能MARI (Manifest Accurate Revolution Infallible)

意味は、「絶対確実な正確さと機械の革命、どんなAIとも性能がはつきりと分かれる」と言う思いが込められている。そして製作者は空仙である。

「現在の位置と敵軍の行動範囲そして予測と確立を立ててくれないか」

「Yes、マスター。では計算します」

「頼んだぞ」

ピ、ピ、ピ、『プログラム作成、計算式を入力、予測計算…』とマリはブツブツとまるで呪文みたいに読誦し始めた…

「いつみてもすごいですね…」

「なんせ、私が作ったからな」

と、たわいのない話をしながらマリが終わるのをまった。

… 二分後…

「マスター、終了しました」

「どうだった？」

「現在地、ヨーロッパ北、ポーランドのワルシャワ。敵行動範囲、東西南北距離約600キロメートル。予測、敵は前方からくる確率37.9%、後方からくる確率98.23%、左右からくる確率は同じで23.47%、敵が攻め込んでくる時間は午前12時ちようどです。以上です」

「ありがたいな。だったら話は早いここで待ち伏せをして奇襲をかけるぞ」

「わかりました、団長!!」

団長と副団長は、待ち伏せをすることにした。

そして時は過ぎ、間もなく時間が来ようとしていた...

ザ、ザ、ザととても重い足音がゆっくりと近づいてきた、そして運命の歯車が回り始めた。

「敵が来たな」

「そうですね...」

「どうしたんだ？、あまり調子がよろしくないが。大丈夫か？」

「はい、大丈夫です...」

ダダダダと勢いよく敵が現れた。

「おかしい、人一人いないぞ。あいつ裏切ったのか？」

「いくぞ、副団長!!」

「はい、」

ぎしゅ、敵の腹部に風穴が空いて大量の血液がまるで噴水のように周りに飛び散った

敵を切り倒し、なぎ倒し、一万の敵兵を圧倒した。

「ぎやああああ、おえ、はあはあ… ぢぐじよう」

「これだよ、これ!!… はっはっは、血はいいなあああ」

「…」

「どうした、副団長？」

「団長…」

「んっ？」

ゆっくりと近づてきて、いきなり…

「死ねえええ!!」

ダダダダ、銃で空仙を乱れ撃ちした。

空仙の体を貫いて風穴を数か所あけて大量の血を噴出した。

「あゝ あああ!!、ぎやあああ。ぐは、てってめえスパッイだったのか…」

「ああ、そうだよ。まああいつらには犠牲になってもらったがな。疲れたぜ、仲間のふりをするのはよお」

「ぐぞお、そんなはず、ながったのに、ぐぞおおお」

血だまりの中で空仙は叫んでいた。

大量の血が流れ彼自身はほぼ、気力だけで意識を保っていた。  
そしてポケットから何やら注射器を出した

「ゴンナノハ、ツガイダグナガツダガ。じがタがナイ」

「なにをやるうとしている!!」

「ぐぞおおおお、」

ぶしゅ、勢いよく注射器を肩に刺した。

すると、空仙は血だまりの中暴れ狂った。

「ぐぎやあああ、あゝ ああああ。ジぬウウウウ」

すると数分間暴れまわっていた空仙はピタリと動きを止めた。

「し、死んだのか?」

「お、お、おおおお」

むくつと立ち上がりなにもなかったようにしゃべりだす。

「いやあ、まさか本当に適合するなんてびっくりだわ。なあマリ、私が適合する確率は何パーセントだ?」

「12.23%...」

「意外と高いな」



「おい!!、俺をわすれるな!!」

「おっと、忘れていた... さてと、どうおとしまえつけてもらおうか?」

「なんで、生きてるんだ!!。しかも傷口がすべて塞がってるじゃないか!?!」

「これは、博士が作った、NNNウイルス、最終手段として残しておいて幸いだったぜ」

「いったいなんなんだ!!、その薬は!?!」

「この薬は中に人体を再構成させるウイルスはいついていて、そのウイルスが体中を回る際に起こる絶大な拒絶反応で大抵の奴は死ぬのだが貴様のおかげで物凄い痛みだったが成功することができた」

「そんなバカなその薬はまだ未完成のはず。なぜ適合した!」

「完成はしていたのさ、だが適合するのに物凄いリスクが必要だから未完成と言ったんだ」

「なん... だと」

「話は終わりだよくも騙してくれたな... ぶち殺してやるよ」

「ま、まて話せばわかる... なんちゃって、馬鹿かお前は見てみる俺にはNK-Mk2インゼーがあるんだぜ。わかるよなこの意味が... 殺すのは俺の方d...」

本当に一瞬だった…。彼が認識できたのは首が宙を舞ってからだ。刹那の如く首は身体から離れ、地面に落ちた。首が取れてもまだ意識はあり口が動いていた。声にはなっていないが確認が取れた。

「い…ま…の…は…な…ん…だ」

「肉体のリミッターが外れ人本来の力を手に入れただけだ」

「く…s」

ぐちゅ、頭を踏み潰した。すると大量の脳みそと血液があたりに飛び散った。びちやびちや、どろどろ

「私の一番の友だった…」

「マスター、元気を出してください。マスターが悲しいと私も悲しくなってます。副団長がいなくなっても私がいます」

「ありがとな、お前が一番の盟友だ」

悲しいことをよそに隊員たちは敵の本拠地を占拠することに成功した。

帰りの道は寂しく隊員たちは賑わっていて空仙だけは空をみやげていた。

副団長の存在は自分が思うよりも大きかった。

「団長どうしましたか？」

「いや、あいつが今どこにいるか考えていたんだ。あいつはとても優

しくてとてもおつちよこちよいでとても能天気でも、とても…。」

「…あの人はマスターのたった一人の友だったんですね」

団長の目には溢れんばかりの涙が溜まっていた。

そしてマリの一言でその涙はゲリラ豪雨のように流れた

「うぁーん」

「だ、団長!」

一晩中泣き叫んだらしいく次の日は顔が真っ赤でした。

これから二年後…

ここは歓楽街、人々がにぎわう街。

まだ戦争中なのに人々の笑い声が絶え間なく聞こえてくる。

「おおい、空仙さんあゝ」

「まてまて、冥明。走るな」

「遅い方が悪いんだよお」

「だったら私も本気出しちゃうよ?」

「だめだよお、空仙さんが本気出したら本当にすごいんだもん」

「わかったよ」

たわいもない話をしていると…

♪、電話がかかってきた。

「もしもし、月神ですが」

「ああ、俺だ。日時が決まった」

「本当ですか!?!、それで日時の方は」

「2146年4月6日6時ジャストに決行する」

「わかりました」

「おい、時間だ。行くぞ冥明」

「わかったよお」

新しい仲間も加わり心機一転。

彼らには過酷な未来があることは知る由もないだろう

人を超えた存在になってしまった月神 空仙に待ち受ける未来は  
何なのか。

次回続く。。。。

みんなに会うことはきつといいことだ

人は、愚かだ。

みんな自分に優しく他人に厳しい… 欲にまみれ、大罪すらも受け入れる。

しかしそれが人間と言う生き物、欲にまみれてない人間などいない…

人は神に願いを頼むが大罪だらけの人間には答えてくれないのであろう。

照りつける太陽がなにやら人間たちを嘲笑って見える。

ガヤガヤと賑わう歓楽街を冥明と私二人で歩いていた。

「ねえねえ、空仙さん」

なにやら話してほしそうに話しかけてきた。

私は冗談交じりに

「なんだい、まさかトイレではないでしょうね。急ぎの用事だから早くいかないといけないんだけど…」

「違うよ!!、今回の任務は何か教えてほしいんだけど!!」

怒りながら私のお腹を殴りつけた

「痛いよ… わかったからちよつと落ち着け。えくと、今回の任務は

『部隊全員で帝国アイギスを攻撃してほしい。頼んだ。健闘を祈る…』だそうだ」

「ええ、帝国アイギスってあの鉄壁の守りと世界を相手にすることもできる軍事力を持つ国。世界最強とまで称されたあの国に攻撃するの!?!」

とても慌てふたむいて、答えた。

慌てている冥明はかわいいな…

帝国アイギスとは昔、第三次世界大戦を引き起こした国で軍事力はあのアメリカをも上まる国家。

一国で世界の半数以上をも相手をし、連合軍をも打ち負かした。

だが、連合軍は最終手段を使い、帝国アイギスに大ダメージ与えたがそれでも致命的ダメージは与えられなかった。

連合軍は帝国アイギスに停戦を申し入れ、帝国側もダメージを追っていたためその案に賛成した。

それで長きにわたる対戦は幕を閉じたがその数年後、息を潜めていた大日本神國がそれに乗じて世界に宣戦布告し世界はまた大戦を仕入れられた。

しかし連合軍は使える兵力は少なく、帝国アイギスと同盟を組むほかなかった。

連合軍と帝国アイギスを合わせ兵力は億を超えたが大半が帝国の兵士だった。。。

だから、冥明はとても慌てていた。

「勝てると思うの?」

「仕方ないだろ、天皇直々の頼みらしい」

すると冥明は落ち着いたのか。

「それなら仕方ないね」

天皇と言う言葉を放ったら覚悟を決めたらしい。

「もうすぐ迎えが来る。急ぐぞ」

「わかったよお」

急いで目的地向かう二人だったが。

ばんっ、冥明が人にぶつかってしまった。

「あつ、ごめんなさい」

すぐ謝ったがぶつかつた相手が裏の世界の人間で睨みつけながら  
こう言い放った。

「お嬢さん何ぶつかつてんの？。ああ、あ、お気に入りのシャツに汚  
れがついちやつた。どうするのお嬢さん？」

なにやら金を請求している様子のようにだ

「お兄さん、申し訳ない。どうかここは場を治めてほしい」

「何言ってるの？、このシャツ高いんだよね。ねえ、クリーニング代の  
40万払ってくれない？」

絶対にそんなに必要なのないような金額を提示してきた。

「いやあ、今急いでるんで払えない」

きつぱりと断った

「おいおい、払わねえとこのお嬢さんもらうよ」

と手を冥明に近づけると、いきなり空仙が

「触っちゃだめだっ!!!」

大声で言ったがその男は触れてしまった。

その瞬間、

ぶちっ、彼の左腕が宙を舞いそこから中に血の雨を降らせた。

「ぎゃああああ、うっ腕がああああ」

耳を劈く悲鳴を上げた。

「だから、言いたのに…。可哀そうだが仕方がないあなたが忠告を無  
視したから」

「なんなんだ…。いったい」

「彼女は私以外が触れるのを極端に嫌うんだ。だから、触るなど言っただんだ」

呆れた様子で答える。

「今度触ったら、頭を吹き飛ばすわよ」

口調が変わった。

「落ち着くんだ、冥明」

「だってこいつが触るんだもん、下手に出たら調子乗るんだもん」

いつもの口調に戻ってしゃべる。

「私が手を出さなかったら空仙さんがあの男を消し飛ばしてたでしょ」

「まあ、連れてこうとしたらね」

話していると男は全速力で逃げていった。

「さてと人が集まってきてしまうまえに急いで目的地に行くぞ」

「わかったよお」

シユン、まるで消えるように足音すら立てずに移動を始めた。

… 一方その頃…

ここは目的地のゲイル大公国

ゲイル大公国とはゲイルⅡシャーロット大公が治める国。



商業で発展した国でもあり各国に武器やゲイル産の希少鉱石などで交易している。

あまり軍事力はないがほかの国が支援防衛をしているためあまり手を出せない国だ。

その国になぜ集まるかと言うと皆さんの想像通り……この国で武器や食料を確保して帝国アイギス望むわけだ。

『いらっしやい、この武器はかの有名な……』ガヤガヤ、たくさんの人が行きかう街……首都ヴェール

「なにか、いい武器はあるかしら……」

「そうそうねえだろう、てか団長遅くね」

「仕方がない、冥明を連れてきているんだ。なにかトラブルでもあったかも」

異様な雰囲気を出す六人組が道を歩いている。

彼らこそが空仙の部隊メンバー。

紹介は後程しよう。

「そうだよ、冥明がいるから仕方がないにやん」

彼女は獣人族の双子、だがもう一人は空仙と一緒にいる。

とても仲が良く息もいつもぴったし……メンバーのムードメーカー」

「じゃあ、みんな手分けして探してみましよう、僕は食料確保しときますね」

「あちきも行くこう、一人じゃ大変だろう……」

彼女は、冷静でとてもおしとやかだが空仙のことが好きすぎて、空仙は少し困っているのが現状だが嫌いではない。

彼の方は、とても思いやりがあり、尚且つ男の娘なのだ。

最初に彼に会ったら絶対に女の子の間違えられる。それが悩みなのは秘密

「では、解散」

みんなは各自、食料や武器などを集めることにした。

時間がたち、空仙と冥明らが到着した。

気配を消していた空仙がみんなに分かるように気配を半分くらい出した。

その瞬間空気が凍り付いた。

ピキーーーーーン

その気配はゲイル大公国全土に満ち渡った。

どんな凡人でも気が付くこの気配はまるで隕石の衝突のようとか、ブラックホールの中のようともいわれている。

だが一瞬つだたため衛兵には気が付かれなかった。

「「団長が来た」」

全員が一斉に気が付き団長のところに即座に集まった

「「団長!!」」

「全員いるか?」

「「全員います」」

「じゃ点呼をとるから返事をしてくれ」

全員いるか点呼をとる空仙

「では、一人づつ呼んでくぞ。神明 裁牙」

「いますわ…」

凜とした美しい声で返事をしたのはいいのだが

「空仙様ああ〜〜」

いきなり豹変して飛びついてきた。

「やめろ、ひつつかないで」

後ろから抱きついてきた。

「まっまあいい、点呼を続ける。朱月 雷華」

「いますよ団長。それと裁牙は離れなさい」

無理やり引き離そうとすると裁牙はおもいつきり抱きつき胸が当たると。  
ムニユ…

背中に感じるこの胸は裁牙なのか成長したなと感じる私がいる。

「ちよつと触らないでよ、私は久々に会ったからスキンシップをしているだけよ」

言い返すが雷華から飛んできた言葉が胸に刺さる。

「これだから乳がでかいだけの『牛』は困るんだよね」

それを聞いて怒ったのか。

「いやあく『絶壁』は、そんなことしか言えないんだよねえ。うらやましいなら頑張ることね」

「なんだと」

「なんによ」

バシッ

空仙が二人の頭叩いた。

「コラコラ、けんかをするんじゃない。いつも言ってるだろ仲良くしろって」

不満そうにケンカはやめたがまだ睨みあっていた。

『はあく』とため息をつく

「じゃ続きいくぞ。冠八 冥明と千夢 櫻」

「二人ともいるよ」

「二人ともいるにゃ」

元気よく返事をした。しかもほぼ同時に。

「二人のシンクロ率はいつみてもすごいな」

「ええくと、永元 塵」

「はい、僕はいます」

いつも見ても男に見えない。本当に女の子みたいだ。

「時間がないから、いっぺに言うぞ。異善 舞、神薙 庵」

「いるぜ、団長さんと会うのひさしぶりだな」

「あちきはおるでありんす」

全員集合することができた。

この部隊の名は『姫道衆』この部隊は天皇直属の最強部隊である。全員NNNウィルスを打ち人を超えた力を手に入れた者の集まり。しかしNNNウィルスオリジナルを打ったのは月神空仙ただ一人…

NNNウィルスの改良版を打ったのが残りの七人  
オリジナルは誰一人成功することはなかった…一人を除いて

は…

「全員、食料や武器は集めたか？」

問いかけてみると全員が一斉にしゃべり出だす。

何を言っているのかわからない

「おい、一人ずつ話してくれ」

すると全員黙り、裁牙が喋りだした。

「はい。武器、食料等は確保しています」

「そうか、なら行くぞ。時間は明日の六時ジャストみんな気合は入ってるか」

『もちろん』と顔で合図した。

準備が完了した空仙一行は帝国アイギス目指し移動した。

帝国アイギスとゲイル大公国はあまり離れておらず姫道衆であれば半日で着く。

だが途中にあるだれもより森『人食いの森』がある。

人食いの森は立ち入った者は必ず帰って来ない魔の森。

普通なら飛行機や飛行船などで行くのだがそれだと時間がかかるため、仕方なく通ることにした。

ヒュ〜〜、冷たい風が吹く

「いやあ寒いな、なあ櫻」

「そうでありんすね」

「なにか、異様な雰囲気を感じるにや」

みんな雰囲気の流れされ自分たちが姫道衆なのを忘れてる…

「皆さんどうなさいましたか、姫道衆なのに雰囲気に流されてはいけません」

裁牙が言ったのはいいが、言った本人が一番怖がっている。

ガサガサ

物陰から何か飛び出してきてびっくりした裁牙が

「ぎやああああ〜〜空仙様ああああ〜〜た〜す〜け〜て〜」

おもいつきり飛びついてきた。

「ちよつ、裁牙何を」

裁牙に押し倒された。

すると手に柔らかいものが乗っかてきてつい

ムニユ… モミモミ

「あん、空仙さんのエツチ♡」

ダツダツダ、雷華が物凄い勢いで走ってきた。

「団長から離れろおおお」

グハツ

蹴りが裁牙にクリーンヒットしたが空仙も蹴りを受けてしまい裁牙と一緒に岩激突、岩が砕けた。

「あつ、ごめんなさい団長」

瓦礫の中から空仙が出てきて

「大、丈夫だよ…」

血だらけの顔で答えた…

そんなこともありながら空仙一行は森を進んでいく  
行く途中では何も起きなかった。  
それもそうだろう、自分より強い相手にケンカを売るバカはいない。

森に棲む主でさえ出ようとはしなかった。

森を数時間歩き目的地の帝国アイギスの壁まで来た。

「高いですね団長」

「そうだな、高さ200m、厚さ5mある」

「そんなにあるんですか!?!」

びっくりする、姫道衆達。

「じゃあ、時間が来るまで待機」

解散をして各々が準備をし始めた。

裁牙や雷華、舞や庵は武器の手入れをし

冥明や櫻は遊んでいる。

塵はみんなの朝食を作っている。

空仙は作戦を練っていた。

チクタク、チクタク

時がどんどん過ぎていく…。戦いが迫ってくる。

そう思うと高ぶる戦意が空仙を襲う。

「みんな、来てくれないか!」

空仙の呼び声が夜の空気を渡ってみんなに伝わる。

「なんやね、空仙はん」

「どうかしましたか?」

「いや、みんなに確認をしてほしかったただけなんだけど。いいかな?」

全員が返事をした。

「じゃ初めに敵の数を確認するぞ」

「OK」

「まず、敵の総勢力は約5億5000万ほど」

「いつ聞いてもエグイ数だぜ」

「帝国アイギスを守る勢力は約2億ほどだ」

みんなの顔色が変わった…

「なんだって〜!!!」

「やばいにゃん」

「ほんに、そんな数くるのかえ」

「エグイですね」

みんながかく乱している。

それも仕方がない、こんな数相手に出来るはずがない。

「落ち着くんだ、みんな」

「こんな数はいてにするわけないだろ」

みんなは、ホツとして話の続きを聞く

「それで、これを使う。衛星兵器『エンビリオン』」

みんなは息をのんだ…

「それは使うんですか…」

「いや、これは使わない」

…『え〜!!!』と言うみんなの声が響く。

「私が1億9000万人相手にする」

みんなは驚愕…

「団長!!、死ぬ気ですか!!」

「そうでありんす。あちきは団長と離れたくないでありんす」

「そうだにや、みんなで力を合わせてたおすんだにや」

「私もまだ空仙さんと離れたくないです」

「わたしだってまだ空仙様とXXXXしてないし、XXもしてないよ」

「あんたのはただの願望でしょ。お願いよ、一人で行かないで」

「僕も美味しいごはん、食べてもらいたいです」

みんなは、必死に空仙の案に反対をした。

当然だろ寝る時もいっしょ、同じ釜の飯を食べ、家族より固い絆に結ばれている。

一人たりとも欠けてはいけないチームなのだ。

「みんなありがとう…でもな、私は死なない。安心しろ」

みんなは泣きそうな顔をしている…

「死なないんだから、そんな顔するな。さあ、塵のごはんたべよう」

「はい!!」

みんなは食事をして楽しい会話、くだらない話、そんなこと話しながら空仙一行は迫りくる戦いに備えて気を張っていた。

そして…時は…来た。

「よし、私が先に行く。私の合図と同時に東西から攻め込め…」  
なにやら不安そうな顔をしている。

「安心しろ…私は死なない…いいな」

「はい!!」

《お前達は絶対に殺させない…》

心の中で固く誓った…

「よし!!、行くぞ!!!」

「おおおお!!」

姫道衆達は、大帝国に戦いを挑んだ… 2億人V8人勝利の見えな



い無謀な戦いに彼らは自分たちの闘志を燃やし生きて帰ることを決意した。

人は、愚かだ。

自分に優しく他人に厳しい…

人は愚かだ。

欲にまみれ、大罪すらも受け入れる…

人は愚かだ。

危険なことを避け、嫌いな奴に押し付ける…

だが稀にいる…

他人に優しく、危険なことを受け入れ

自分を犠牲にする者が…

見誤りはだれにだってあるものだ

聳え立つ壁はとて大きく物凄くかたい… 破壊は無理だろう。  
進入路を探る空仙は少し悩んでいた…

「どうしようかな、来たのはいいがどうしよう…」

その壁は近くで見ると外側に反っていてネズミ返しになっている。  
「ふむふむ、そう言う事か。ならば仕方がない…」

空仙は天高く手を上げ拳を作りその拳に有り余る力を込めた。

「さてさて、壊せるかなあ」

戦車やジェット機のミサイルでも傷すらつかないこの壁を殴りで  
壊すなど凡人にまず思いつかないだろう。

だが空仙はやろうとしている。

その拳が壊れるかもしれないのに…

「よし、行くぞ!!」

力を込めるその拳にエネルギーが込められるのを感じ取れる。

今にも弾けそうなそのエネルギーの凝縮された拳にまだ力を込め、  
限界まで高めそして…

『消え失せろ!!!』

ため込んだエネルギーの凝縮された拳が解き放たれ壁に激突し、壁  
は消し飛び帝国アイギス全土に鳴り響いた。

それはまるで巨大隕石が衝突するかのような爆音だ。

それを聞いた国民は茫然と壊れた壁の方を向き、目を点のようにし  
ている。

この爆音を聞いた帝王アイギスⅡヴァーミリオンは直ちに国家非  
常事態宣言を発令。

鳴り響く危険信号音は国民を恐怖のどん底に落とした。

「きやああああ!!」

「うわああああ!!」

聞いたことのない音に慌てふためく国民。

それはそうであろう、帝王すら使うことはないと思っていたのだから。

帝王は部隊をまとめ、壊れた壁の方へ向かう。  
そして空仙は行動にでる。

「さて、行きますか。国民は関係ないから殺さなくていいか…」  
城の方角へ足を歩め、気配を消し息を殺す。

「任務は絶対に成功させる」

その声には感情はこもっておらず唯の死神の囁きともとれる。  
徐々に近づく城を前にして逃げ惑う国民がとても邪魔だと感じ  
ることをふと頭に浮かんだ…

《あっそうだ、やっぱり殺そう…》

そう思い、老若男女すべての人間を殺し始めた。

悲鳴、泣き声、嘆き、まるで地獄絵図だ。

無感情に人を斬る…情を捨てる…人間をやめる。

唯々人々は無情にも空仙の前では肉塊。

「どけ、私の目の前に立つな、殺すぞ」

死神？、悪魔？、魔王？、そんな生易しい者ではない。

恐怖、絶対なる恐怖、人は本当の恐怖を目の前になるとどうなるか  
わかるか。

大体のやつ気は失い、ある人はショック死する。

「やつと現れたか…」

目の前には大勢の敵兵。

目で見える範囲では約500人後方に敵の気配を確認約500人  
左右に500人づつ。

「ふっ、囲まれたか」

すると敵の隊長らしい人が空仙に近づく。

「おい、お前がああ壁を壊したのか!?。どうやって壊した!!」  
敵の隊長が問いかけるがそんなときくよしもないだろう。

「邪魔だ…雑魚は引っ込んでろ…」  
重々しい口調で罵倒する。

「この状況を見てよくそんなこと言えるな。全員!!かかれ!!」  
「うおおお!!」

大量の兵士が攻撃し始めた。

「バカが…」

その瞬間大量の血が飛び散った。

それはほんの一瞬、唯の一瞬、それは刹那の如く…

淡い隊長の恐怖が本当の恐怖へと変わる。

「そんなバカな、あの兵の数を一瞬で。そんな、そんな…くそ  
おおおお」

血だまりの地面を恐怖の顔で襲いかかってきた。

だがそんなことは無駄なこと。

「華麗に殺してやる。死ねっ」

隊長は気が付かない、自分が斬られたことに。

「一の刀 八重桜…」

その太刀筋は華麗で人間では目視できない。

「とても奇麗だ、人は欲にまみれとても醜い…だが血は奇麗、まるで  
宝石のルビーのようにとても赤く透き通り私の穴の開いた心を満た  
してくれる」

隊長の視覚が分かれて目の前が見えなくなり頭部の半分が斬り離  
れた…

「お前…にん…げ…」

言葉は途切れ途切れになり隊長は唯の肉塊になった。

隊長が死んだことにより兵の統率がなくなりこのった兵士は空仙  
が肉塊にした。

「こんな雑魚だけの集団だっけ？」

帝国軍を圧倒したが帝国軍はファントムをまだ戦闘には出して  
いなかった。

徐々に減る敵の軍勢はなにやら儂かない。

だが空仙は知らないであろう…間もなく、試練が訪れることを。

…一方その頃壁が壊れる数分前…

姫道衆の残り7人は指定された場所にそれぞれ向かっている。

向かっている途中で爆音が聞こえ、帝国中に非常事態警報が鳴り響く…

「団長、壁を壊しちゃったか」

「まあ、それが妥当だにや」

初々しい声が行き交う、冥明と櫻のようだ。

「やつぱり、そうなっちゃたか。仕方がないね」

「そうだにや、ネズミ返しになっていて入口が見当たらないからね」

走りながら会話をしている。

「えっと、空仙さんが合図をしたら突撃だったよね」

「合ってるにや。合図って何をするんだにや」

呆れた様子で答える冥明

「そんなこと私に言われても分からないわ。でも、私達に分かる合図だと思うよ」

「ふーん」

そんな会話をしながら目的地向かう二人

するとなにやら遠くの方で大勢の足跡が聞こえる。

彼女たちは獣人族中でも一二を争うくらい耳が良く勘がいい。

「何かたくさんの足音がこちらへ向かってくる」

「何か重いキヤタピラの音も聞こえるにや」

二人の脳内に最悪の場面が過ぎった。

「まさか…」

「に、にゃくん」

… 壁の東…

こちらでは舞と庵が待機している。

「合図が来るまで暇だぜ」

「そうやね、合図が来るまで精神統一でもしていればよかろう」

暇すぎる二人に近づく者がいた。

「お嬢様方向をしているのですか？」

若い男性が舞と庵に話しかけてきた。

「なんだ？ テメエエ」

ケンカ腰で言葉を飛ばす。

「やめるでありんす。申し訳ない、貴殿は一体誰なのじゃ？」

謝り、若い男に質問する。

すると男は応答してくれた。

「申し訳ない。私はアイギス帝国、ファントムが一人イーロンⅡマルクスよろしくね」

その名前を聞いた瞬間、舞と庵は戦闘態勢に入った。

「おいおい、まさかトップ5の一人が来てくれるとは有り難いぜ」

「申し訳ないが貴殿には消えてもらうでありんす」

物凄い殺気で周りの空気が急激に重くなり常人にはとても耐えられまい。

しかしその殺気を涼しい顔で受けるマルクスを見て、二人は彼を強者と認めた。

「おい、庵。こいつ強いぞ…」

「そうでありんすな、あちきらの殺気をあんな顔で受け止めておる」

「いくぞ!!」

舞と庵の戦いが始まった。

するとマルクスも攻撃を開始した。

「仕方ありませんね、私は女性を傷づつけたくはありませんが致し方ない。

激しい激闘で空気を裂け、目に見えないほどの速さで攻撃を繰り広げる三人。

人の領域を超えた戦いといえはわかるだろう。

唯一見えるのは刃先が当たり飛び散る火花と斬撃のみである。

「やりますね、貴方達は人間ですか？」

一旦攻撃をやめるマルクス。

それを見た二人も攻撃をやめ、話す

「そうですね、わっちらの事も話しておくのが道理でありんすな」

「俺らは大日本神國、天皇直下の御庭番。姫道衆が一人異善 舞だ」

「同じく姫道衆の神薙 庵でありんす」

自己紹介をして道理を合わせた

「俺らは人間だが人間ではないんだぜ」

意味の分からないことを聞いたマルクスは少し強張った。

「なに意味の分からない事を言うのかね。ちゃんと教えてほしいのだが」

舞の意味の分からない答えに質問を重ねた。

「そうでありんすね…：こう言えば分かるかもしれないねえ」

マルクスはその庵の重々しい口調に少し息をのんだ。

「一体何者なんですか…：」

恐る恐る口を開け言葉を放った。

「わっちらは、科学が産んだ化け物じや」

すると庵の周りの周りの空気が凍り始め、あたりの地面や草、木々や原子も凍り始める。

すると舞が即座に庵のそばから離れた。

「おいおい、庵。それを使うのなら先に言ってくれ」

少し震えた声で言い放った。

それもそのはず、庵の能力は不老不死と『凍結』万物全てのものを凍らせる。

「何なんだ一体、身体が…：凍り付いていく…：」

マルクス身体が足から徐々に凍りついていっていく。

「あ、足の感覚がない…：腕も、身体も、やだやめてくれ。殺さ…：な…：」

途切れいく言葉は無情にも届かなかった。

そして凍り付いたマルクスを庵は蹴り壊した。

「あああ、やっちゃった」

「仕方ないでしょ、こやつが子供扱いするから」

ファントムの一人を倒した舞と庵だがまだマルクスはまだ下っ端だった。

…：西の壁…：

ここでは、雷華と裁牙と塵が待機している…：だが

「はあ、なんで雷華と同じ組なのかしら」

深いため息つき何ともけだるそうに雷華を見つめる。

「こっちのセリフよ、なんでこんなチームにしたのかわからないわ」

裁牙を睨みつけながら言葉を放つ。

「お、落ち着いてください裁牙さん、雷華さん。今はそんなことしてる場合ではありませんよ」

裁牙と雷華の中に入り二人の口喧嘩を止めようとする。

「そうね、空仙様の言うことは聞かないと」

「まあ、団長の命令ではなかったらこんな奴と組まないわ」

「それは私が言いたいことよ!!」

いつもながらこんな状況なのにいつ通りの風景が続く。

「本当に仲がよろしいですね」

塵が言うと

「全然仲良くありませんよ!!」

「全然仲良くありませんわ!!」

息ぴったり言い返した。

《ほら、息ぴったり。本当に仲がよろしですね》

こんなことが続き、ここにはファントムは来なかったようだ。

… 帝国アイギス内…

「全軍に次ぐ、国内にいる敵は強敵だ。禁止兵器の使用を許可する!!」

これは国の危機だ仕方がない必ず首を納に來い」

アイギス帝王は兵士やファントム達に禁止兵器の許可を出した。

国内のすべての兵士を空仙に向かわせた。

迫りくる軍勢は1億9999万8000人の兵士。

そう、ほんとは1人であいてにするつもりだった。

そして終わったらみんなを呼ぶという作戦なのだ。

「仲間一人たりとも殺させない」

そして… 時は来た…

瓦礫の中を進む空仙。



そして囲まれた。

「とまれ、貴様が反逆者か… 私は帝王アイギス。私が直々来てやったんだ、ありがたいと思え」

とても上から目線の言い方に少し苛立ちを感じる。

「ありがとね、手間が省けた。お前は殺さないといけないな」

「そうか、ならやってみろ。全軍に次ぐ、目標反逆者…」

兵士たちが武器を構え、エネルギーをためる。

この数のV8-S 核閉砲をくれば普通なら消し飛ぶどころではない。

だが姫道衆にはそれぞれ不老不死のほか個人の能力も手に入れる。

「エネルギー充填完了」

エネルギーが高まった核閉砲は今にもその力を出そうとしている

「よし…。撃てええええ!!!」

核閉砲のトリガーが引かれた。

そのエネルギーの塊が四方から飛んでくる。

「そんなものはきかない…」

エネルギーの塊が空仙にあたり、閃光に包まれた瞬間。

エネルギーの塊が戻ってくるそれも撃った直後より速さは格段に上がっている。

その塊が兵士たちに返ってくる。

そして、直撃して兵士、フロントム、帝王そして空仙を巻き込み弾け飛んだ。

それはまるで天そのものが崩れ落ちてくるような爆音。

空仙の能力『方向転換』物体の方向を変える能力

後に『flash of demise』と呼ばれる

帝王は見誤った、核閉砲の威力を… その威力は120万ギガトン…

帝国の領土のほとんどが消滅した…

壁のおかげで助かった七人は思った。

団長が… 死んだ…

そう思いたくないがああ、の爆発音と閃光は帝国の中心から、空仙がいるところから発せられた。

「ま・・・まさか」

「死なないっていたのに。。。」

「そんなにや」

「うそ、でしょ」

「うそだよな、な」

「僕は信じませんよ」

「団長はん、、、」

悲しい雰囲気、が姫道衆達を襲う。

そして、連合軍は決断を仕入れられた。

消滅した帝国アイギス、兵力はああ、の爆発消し飛び。

残った兵はバラバラになり帝国アイギスはなくなった。

そして・・・

世界の終わりそして始まりは不条理だ

帝国アイギスが消失してから数十分後…

何もない場所を探す姫道衆

「団長おおお〜」

「空仙様ああ〜」

みんなが空仙のことを探している。

しかし返事はないなぜならそこに空仙はいない

空仙は… 上空にいる。

みんなが悲しんでるのをよそに上空で高みの見物をしている。

「きれいに消し飛んだね」

少し笑いながら言う。

すると帝国軍の残党がなくなった帝国へと進んでいるのが見えた。

「あら、見る限り1000万はいるな」

空仙は、みんなの元へ降りて行った。

「団長が本当に…」

「死ない言っただけなのに」

「ほんとだにやん」

みんなは、本当に団長が死んだと思い込んでいるが裁牙だけは生きていると思っている

「空仙様がこんなので死ぬような人ではありません」

裁牙は泣きながらみんなに怒る

「わたしだってそんなこと考えたくありませんわ… だけどこの状況で生きてるなんて」

雷華は、悲しそうに答える。

「僕だって…」

「わっちもじゃ」

「俺も…」

みんなが悲しんでいると…

「おい〜」

すぐ反応したのは裁牙だった。

「あれ!?!、空仙様の声が聞こえる!!」

とてもビツクリした様子でみんなに言う。

「あんた、団長が好きすぎてとうとう幻聴まで聞こえてきたのか」  
呆れた様子で言う雷華。

すると櫻と冥明が反応した。

「あ、本当だにやん」

「本当だね、聞こえるよ」

獣人族の彼女ら言うのであれば本当だろうと思い少し希望を持ちつつ周りを探し始めた。

すると徐々に呼び声が近づきはきつりと聞こえる。

「おい」

みんなは声の聞こえる方角に視線を向けた。

すると上空から降りてくる空仙が確認できた。

「団長!!!」

歓喜の声をあげみんなはとても喜んだ。

「団長!!」

「空仙様ああ!!」

「団長さん!!」

「団長!!」

「ふっ、俺はわかっていたぜ」

「だ、団長しゃくくん」

「団長はん」

みんなが空仙に飛びつく。

「心配かけたね」

みんなに謝る。

「ほ、ほんとよ、しんぱいかけないでよね」

「全員空仙様のこと待ってました」

とても喜びムードだったが敵が迫ってきていることを全員に話した。

「...と言うことだ、ここはバラバラに逃げる」

「なぜ逃げるんですか?。戦えがよろしいかと」

と雷華が提案してくれたが空仙はそれを拒否した。

「いや、あいつらは敵ではない唯の残党だ。殺す必要はない」

「しかし、せっかく集まったのにまた別れるなんて僕は嫌ですよ」

みんなは、塵の言葉に同感した。

「別にいなくなるわけではない。また会えばいいだろ」

「ですが・・・」

すると遠くから大勢の残党と重機などの音が聞こえる。

「来た、絶対にまた会うぞ」

姫道衆全員が頷き、別れた。

それぞれ違う方向に全速力逃げた。

また会うことを誓って

・・・それから数日後・・・

ここは連合軍司令部・・・

「どうとうこの時が来たか。使いたくないが使うしかない」

パソコンを取り出し、発射場面をだす。

するといきなりエラーが出た。

「な、なんなんだ一体。制御できない」

パソコンにウイルス入り世界各国に核融合爆弾が雨のように降り

注がれる。

電源を落とせばいいことにきずかない。

「くそやばい、これでは世界が終わってしまう」

そして、発射スイッチが押された。

それは誰も押していない唯の誤作動。

「・・・今までありがとな・・・」

「・・・はい・・・」

数十分後世界に核の雨が降り注いだ

世界は核の炎に包まれる。

そして、世界は終焉を迎えた。

そして、彼らも・・・

「やはりお前のせいか、マリ」

「YES、マスター。私は地球の掃除をしたままです」

なにやら空仙とマリが怪しい会話をしている。

「あいつら知らないだろ」

「大丈夫でしょう、不老不死なのだから」

「しかし、修復するには時間かかるぞ」

「死なないよりマシでしょ…」

「厳しいことを言うな…」

ここで説明しておこう。

不老不死は不老不死なのだが体が消し飛ぶとその再生には多大な時間を有する。

NNNウイルスは細胞一つ一つに脳を生成して細胞が一つでも残っていれば完璧に修復される。

「さて、私はこの世界の行く末を見ようかな…」

「お供します。マスター…」

…  
数十億年後…

あれから多大な時間が過ぎ科学は衰退したがその代わりに魔法と魔術があらわれた。

…  
プロローグ終了…

「長かったなここまで来るのは」

少し疲れたよ様子で話す空仙

「そうですねマスター。運よくエリア52の地下秘密基地が残っていて幸いでしたね」

無機質な声で答える。

彼女は、空仙が作ったボディにマリを移植しマリに身体を与えていた。

「さて、もうそろそろ引きこもり生活をやめてあいつらを探しに行き

ますか」

「そうですね、何やら魔法魔術が発展したららしいです」

「そうなのか。面白そうだな・・・だったら学校というものに行ってみようかな」

学校にいかうとする空仙

「そうですね、数十億年間ずっと地下にいた私達には今現在の最新データはありませんので学校と言う着眼点はいいと思いますよ」

「まず、学校に行きそのあとにあいつらを探そうか」

長い廊下を歩く。

空仙とマリしかないその基地は太古の昔アメリカと言う国が秘密裏にいろいろやっていた施設。

とても深い場所に位置して核融合爆弾はここまでとどかなかつたらしい。

少し遅いが核融合爆弾の威力は一つ120メガトン、それが約1万以上を発射された世界は滅びたがギリギリ地球は破壊されず徐々に回復をして今に至るわけだ。

長い廊下の先に扉がある。

「角膜認証及び認証番号ヲ入力シテクダサイ」

「認証ボタンの番号を押して、角膜認証をした」

「認証ヲ確認・・・イッテラッシャイマセ」

扉を抜け、さらに廊下を歩く。

反響する廊下には何もいない唯の壁のみ。

光すら届かない地下には人工の光のみが照らしている。

数分歩くとエレベーターホールにつく。

「よし、地上に出るぞ」

「YES、マスター」

地上に上がり始めるエレベーター。

だんだん近づく地上にワクワクする空仙。

「つきます、マスター」

開く扉から、太陽の光が入り二人を包む。

見知らぬ世界に足を歩ませる。

「よし、いくぞー！」

足を出した瞬間、目の前にはたくさんの人が集まっついてこちらを不思議そうに眺めている。

それもそのはず、空仙とマリが出てきたのは世界樹『ユグドラシル』の木の根元部分にある扉から出てきた。

『ここは精霊の国』『アスタリカ』『精霊とともに生きる国』  
「やばいな、顔を隠して逃げるぞ」

「YES、マスター」

エレベーターの扉を閉め、空へ逃げた

周りの人たちの反応は

「お、おい見たか…」

「もしかして…」

「大精霊 ユグドラシル様!!?!」

一気にその話題は世界を渡った…

二人は近くの森に降りていく先を決める

「私の計算上あれから年月を経て地球は膨張して前より大きくなっています」

マリの目からその予想図が映し出された。

「結構でかくなっております」

「なぜでかくなったのかその経緯を話してくれないか」

空仙が聞くと経緯を始めた

「まず、核融合爆弾により地表の温度が一気に上がり徐々に地表が溶けてマグマになり地球が防衛反応が起き、膨張を始めた。そのあと徐々に冷えていき、最終的にこの大きさになりました」

これまでの地球の成長を細かく話してくれた。

「ありがとう。ふむふむそういう事か…我々が地下にいるときにそんなことがあったとは」

話していると後ろから誰かが話しかけてきた。

「ちよいと兄いさん、こんな森で何をしているのですか?」

フードを被った若い少女が質問をした。



「それより、お嬢さんこそこんな森で何をしてるんだい？」  
質問を質問で返した。

「この森の主です」

少女から言われた言葉はとても驚愕だった。

「主なのか・・・ならば教えてほしいのだが、近くに学校と言うものはないか」

「いや、だから私の問いにも答えてほしいのだが」

少女はまた問いかける。

「ごめんごめん、君の領域に入ったことは謝る。私は降りれる場所を探して丁度ここに森があったから降りたまでだ」

主に謝り、理由を話す。

すると主が

「なら、森の秘宝を取りに来たわけではないのだな？」

「ああ、そうだ」

そう言うとき森の主が

「ならばいい。学校と言ったな、ここから西に5キロ進めば大都市に出るからそこに学校があるだろう」

森の主が答えてくれた。

「ありがとう、また逢えたらお礼はするよ。じゃあね」

「お騒がせしました」

二人は西の大都市を目指すことに決めた

「変な人間がいるのだな」

主が呟いた・・・

森を出て山の入り口についた

「ここを超えた先が大都市か、なんかワクワクするな」

高ぶる気持ちは抑えられない。

「待ってくださいマスター、ここに『山賊注意』と書かれております」

マリが空仙に言った。

「まあ、何とかなるでしょう・・・」

そんなことにも動じず山道を歩み始めた。

山道はとても狭く車一台がやっと通れるくらいしかない。

「狭いなこの道」

「そうですね」

愚痴をマリに聞いてもらおう空仙そこに山賊が現れた。

「ちよつと止まりな」

いきなり刃物を近づけた。

とても切れ味は良さそうさ。

「なんですか？」

「こつちは急いでるんだが」

山賊に言った

「おいおい、この状況で何を言ってるんだ？。金品と隣のかわいい姉ちゃんを渡しな」

六人くらいのグループが取り囲む。

するとマリが攻撃態勢に入ったが

「やめろ、マリ」

攻撃態勢のマリに言った。

「YES、マスター」

攻撃態勢をもとに戻した。

するとゆつくりと山道の巨大な岩を見て指をさす  
「なにをやるんだ？」

全員が注目するのを見て軽く叩いた。

その瞬間巨大な岩石はバラバラに砕け塵になった  
それを見た山賊たちは一目散に逃げて行った。

「はあくこれだから生半可な若者は・・・」

「先を急ぎますよ、マスター」

「そうだな、進むか」

二人は山道を進んだ

数十分後、山道を抜けた。

あと少しで着く、そして目的地に着いた。

とても賑わうこの国はアスタリカの隣国『ブラツディカ』

世界でも一二を争うこの国は魔術の先進国。

日々新しい魔術が生まれ世界に貢献してる。

「結構活気ある国だな」

すると周りから視線を感じる。

「マスター、私達の服装に問題があるのかも知れませんが」

見てみると大日本神國御庭番姫道衆零番靈装を着ていた

「やば、服変える?」

マリーに聞いてみると

「変えなくてよろしいかと思えます」

照れながら、答える。

「ありがとな、じゃあ探しに行くか」

二人は人通りの激しい道を歩き、学校を探す。

## 新世界にて二人は一人だ

人の往来の激しい大通りを抜け、落ち着いた場所で考える。

「マリ、誰に聞けばいいと思う?」

「そうですね、まず手当たり次第に聞いていきましょう」

最もらしい答えを言う。

「そうだな、手当たり次第聞いてこうー!」

二人は首都『バルディカ』に向かう。

また人の往来の激しい大通りに出る。

とても活気ある場所であるがここは首都から一番離れた街『ビル

ディ』

ガヤガヤと人の声が飛び交う

「らっしやい、今日は取れたての魚が速達で届いたよ!!」

「ちよつと、その奥さんこの宝石は幸運を呼ぶものです。一ついかがですか」

商業者たちがセッセと商売をしている。

当たり前なのだが。

二人は街行く人に声をかけ始めた。

「すみません、ちよつと聞きたいことがあるのですが」

マリは上がシャツ、下がジーンズ風なエプロン姿の男性に声をかける。

「なんだ、こんな忙しい中声を掛ける奴は...」

その男はとても迷惑にそうか答えた。

「見かけねえ服装だなどこから来たんだ?」

その男は手を休め質問に応じた。

「すみません忙しい中。私どもは遠く異国の方からやってきました」

マリは通訳した。

それもそのはず、空仙はまだこの世界の言葉を話せるはずもありません。

マリはAIのため周りの人の声を取り入れて解読し話すことができました。

「そうか通りで見たことのねえ顔だと思ったよ」

少しばかり陽気なしやべり方になる。

「すみません、休憩入ります」

その男は仲間に向かって言った。

「分かったよお」

仲間がそれに答える。

「じゃあ何もしらねえお前らに特別、知らねーことを答えてやる」

そう言つて、石段に座り飲み物を飲み干す。

「ありがとうございます。では、まずこの世界がどうなってるか教えてほしいのですが」

「そうかお前ら何にも知らねえみてえだな。わかった教えてやる」

その男は嫌な顔せず質問に答えてくれた。

「まだ、俺の名前を言つてなかったな俺の名前はベネディクトよろしくな」

ベネディクトは二人に手を伸ばし握手を求めた。

「よろしくね」

「よろしくお願ひします」

ベネディクトと握手をした。

「じゃあ続きを話すぜ」

話をもとに戻した。

「まず、この世界の仕組みだが…この世界は二つ存在するだ」

ベネディクトのその言葉にマリのデータベースに衝撃が走った。

マリがそのことを空仙に伝えると。

「本当に!!、すごいね新世界は…」

「それで二つの世界とは?」

マリがベネディクトに聞く。

「でだ、この今いる世界が浮世と呼ばれるところ、別名『アルカディア』そして常世と呼ばれる世界、別名『黄泉』、まあ表世界と裏世界と覚えれば良いと思うが一応覚えときな」

「そうなんですか、データに加えました」

その口調にベネディクトはすこし疑問を覚えた。

「表世界の国の数は約50で裏世界の国の数は20で合計70だ」

「結構少ないんですね」

「遙か昔にたくさんの国があったて聞いたことがあるがほんとかどうかかわからん」

「昔と言いますと?」

マリがその言葉に質問をした。

「そうだな、ある地殻調査で数十億年前の地層に人口物ができてそれが世界中で発見された。もしかしたら昔は、今の世界をも上回る超文明があつたとまで言われているぞ」

「そうなのですか」

マリは驚いていた。

文明の発達がここまで早いとは考えていなかったのです。

「話を戻すがまず覚えておかないといけない国がある。まずはアスタリカ、この国は隣国だが世界を制する世界樹がある国だ」

「なぜ、世界樹があると世界を制することができるのですか?」

自分の疑問をベネディクトに話した。

「それはな世界樹は太古の昔、世界がまだなかったころにでき、この世界に緑、水、そして、生物を誕生させた。であれば世界樹は世界を壊滅させるほどの力もあるかもしれないから世界評議員達はこの世界樹を世界共通遺産にしたのだが実質あの力を使えるのは選ばれた者かアスタリカ精霊国 女王『ユリアⅡガイルⅡフレデリック』。しかし、妙な噂を耳にしてな世界樹から人らしき者が世界八不思議の一つ、世界樹の門『イルミンスール』から出てきたらしい」

ベネディクトは驚いたように言う。

「どうして、そんなに驚くのですか?」

「そりゃあ驚くだろう何せ別名『無力化の壁』だぜ。どんな魔法も無力化するあの扉から人らしき者が出てくるなんてビッグニュースだよ」

「そうなんですか」

「でだ、次はここブラッディカ。ここは名の知れた国でかなりの数の優秀な魔法使い、魔術使いを出した国だ。だがここの首都バルディ

力は近づかない方がいい」

なにやら 深妙に言うベネディクトにマリが

「なぜですか、私たちそこへ向かう途中なのですが」

「あそこは貴族たちと聖騎士のみが入れるところなんだ、だから君たちのような者が来たら即刻処刑される。あそこに入るには通行許可書が必要なのだが極稀に下りるくらいだ」

呆れたような雰囲気と言う。

すると考え込むマリ

「どうしましょう・・・」

するとベネディクトが

「なぜ首都バルディカに行きたいんだい？」

「私たちは学校を探してまして、首都に行けば良い学校がると思い・・・首都への道を教えて欲しくて本当は話しかけたのですが・・・」

するとベネディクトがいきなり

「あんたら学校を探してたのか、なら話は早い、私は休日はこうやって商売人をしているが本業が学園長だからな。ここで会ったのも何かの縁、どうだろう私の学園に来ないか？君たちが良いと言うのならだが・・・ どうだろうか？」

とても無邪気な声で話す。

二人は驚愕した・・・ ベネディクトの声が少女の声になっていたのだから。

「あっ・・・ やべ、つい興奮しすぎて魔法が解けちゃった・・・」

すると徐々に大男の体が見る見るうちに少女の体に変貌していく。

それを見ていた二人は

「「これが・・・ 魔法 」「

と言った。

そして、その仲間の一人が来た

「あああ、学長。魔法が解けきってますよ」

仲間の一人が呆れた様子で答える。

「いい人材をみつけたのじゃ」

さつきと比べ物にならないくらい的美少女がそこにいた。

「えっ？、ベネ…デイクト…さんですよね…」

恐る恐るマリが言う。

するととても可愛い声で

「そうじゃ、わしがベネデイクトじゃ。あと、ベネデイクトはあの姿の時の名前…今は四代目、学園魔術都市学長『ジエミニニホワイト』ダイアモンド』これが本当の名前じゃ！」

ない胸を突き出しいかにも「えっへん」と言いそうな顔で言う。

マリが学長に

「なぜ、私たちをその学園…魔術都市？に呼ばれたんですか？。その理由を聞きたいのですがベネデ…ホワイト学長」

「ホワイトでいいのじゃ。それはのお、おぬし達からまだ開かれてない魔路を開かせたいと思ったからと学校を探していると聞いて、わしの思いとおぬし達の思いが一致したから言ったまでだが…嫌だったかの」

少し寂しそうに言う。

これを見たロリコンどもは必ず萌え死するくらいとてもキュートだ。

「待ってください、これまでの経緯をマスターに話しますから」

「マスターとな？」

「私の創造主です」

それを聞いた二人が空仙に飛びついた。

訳の分からない言葉に沈黙するだけの空仙。

それが分かったのか二人は空仙から離れた。

「うっうん、ま…まずじゃ二人を魔導船に乗せ直ちに戻るぞ」

咳払いをし、少し落ち着いた風に話す。

「そうですね、私の名前も言っておきますね。私は『ジエミニニブラックダイアモンド』学長の妹です。」

ブラックさんを見て思う人はいるだろう。

絶対に初め見た人はブラックさんの方を姉だと思っだろう。

それくらい二人の雰囲気は全く違う。

「そう何ですか」



少し困惑するマリと空仙

「さて行くぞい」

いきなり空仙とマリが空中にとび上がった。

「いたいなんだ、これは!!」

「これは、魔法の一種かもしれません」

目の前がボヤケなにやら浮いてるところに出た

ここは、学園魔術都市最大戦闘母艦『イージス』の甲板だった。

物凄い暴風が四人を襲う。

「学長どこに転送してるんですか」

ほとんど暴風でかき消された言葉は微かに三人に届いた。

「仕方なからう四人なんて単独でやったのは初めてだったんじゃないかあ」

「ええ?、なんて、聞こえませんかよ学長おお」

すると甲板の扉が開いた。

「こんな機械じみた物が魔法で動いてるなんて…」

「そうですね、マスター。我々はとても貴重なものを見てるのかも知れませんか」

二人は感心し感動もしていた。

するとかわいい声で

「おぬしら、早う入らんか扉が閉まるぞ!!」

ほぼ聞こえなが少し耳に入る。

「やばいぞ、マリ!」

「YES、マスター」

二人は小走りをしてギリギリ間に合った。

そして艦内を案内してくれた。

「まずな、この魔導船イージスは遙か昔の古代の遺物なのじゃ。しかしいくら魔力を注ぎ込んでもうんともすんとも言わないのじゃ、故に我が学園魔術都市の総力をあげて今日完成したので試運転がてら行ったのじゃ」

自信満々に自分が作ったかのように話す。

「今日完成したのか、すごいね」

「そうですね、マスター」  
するとマリが

「この形状、この内部構造からして帝国アイギスの最終決戦用戦艦エ  
ンドです」

マリが空仙の耳元で囁く。

そして小声で

「そうなか、通りで帝国風な彩色だ。まあ綺麗だからいいのだが」  
「どうしたのじゃ、二人でボソボソしやべってなにか欠点でもあった  
のか？」

二人でボソボソ話していると後ろからホワイト学長が空仙に向  
かって飛びついてきた。

今、かたぐるま状態だ。

「わっ！」

すこしよろける空仙

するとブラックさんが

「学長、だめですよそんな失礼なこととしては」

ホワイト学長を捕まえようとするが

「いやじゃいやじゃいやじゃああ、わしはここが良いのじゃ」

わがままを言う学長。

すると空仙が紳士的態度をとる。

「別にかまいませんよ、もうすぐ生徒になるので」

マリに翻訳してもらい言ってもらおう

「そうですか、申し訳ございません」

深々と謝るブラックさん

ホワイト学長を乗せて艦内を案内してもらった。

… それから二時間後…

「ここが今日泊まる部屋です」

ここまで来るのにとっても時間が掛かった。

「ふう、疲れた結構なか広いですね」

「そうですね、マスター私も少し疲れました」

二人はとても疲れた様子でベッドに横になる。

「お疲れ様です。後程お呼びにしますのでそれまでは部屋の中、艦内どこでも言っていていいですが動力室は機密事項のためまだ見ていただけるわけにはまいりません。それ以外であればどこにでも行つてよろしですよ」

「じゃあのおく」

二人が帰る瞬間

「ちよつと待つてくれないか」

二人を止める空仙

「なんじゃ、何か用か？」

ホワイト学長が要件を聞いた

「なんなんだ、あの巨大な穴は…」

空仙が指さす方向にとつてもない巨大な穴が開いていた。

それは底がないような感じすら漂わせる。

「そうか、まだあの話途中じゃったな。まず国から言うぞ、アスタリカ、ブラツディカそれと今向かう学園魔術都市『ジャンパング』最後に帝国『ギラ』この四つの国が表の世界の主要な国じゃ。で、あの穴なんだが同じ穴が世界で確認されている」

「ではあの穴は一体何なんですか？」

少し二人の顔が強張る

「あの穴は…世界で七つ確認されたことから…『虚無の目』と言われている」

するとブラツクさんが言った。

「そして、この穴の中から何かが出たと言われています」

「それでじゃ、我々世界評議会はこの出た者の行方を捜し、そしてこの出てきた奴らの名前を『大罪人』と呼んでいるのじゃ。そして、運よく大罪人が出るときの映像を入手できたのじゃが」

「みたいか？…」

ホワイト学長は深妙に聞いた。

そして答えは当然YESだった。

「ならばついてくるのじゃ」

艦内の通路を歩き、多目的室につく

「よし、一度しか見せないからちゃんとするのじゃぞ」

そして映像魔石から映像が映し出されたがとてもじゃないが姿までは確認できないほど映像は荒れていた。声も途切れ途切れで聞こえてくる。

「：はど：い：た：を破：な人：い」

次の場面にかわる。

それも前と同じでほとんど映像は荒れており、声も途切れ途切れ…

「：と約：た。ま：うって：み：るね」

ここで映像は切れていた。

「ここまでが大罪人の映像はここまでじゃ」

「何かわかったか、マリ」

しかしマリは首を横に振った

「そうか、どこかで聞いたことのある声だったが…気のせいか」

「では空仙さんマリさん、何か用がありましたら館長室まで来てください」

ブラックさんとホワイト学長は館長室に行った。

「私達も部屋に戻りましょう」

「そうだな…」

二人は部屋に戻った。

…数分後…

誰もいなくなつた室内にはポツンと映像魔石が置いてある

するとさつきまでの映像の続きが映った。

まだ映像は続いていたのだ。

その映像だけは声だけだったがはつきりと聞こえた。

「団長、永い間お持たせしてすみません。今約束の場所に行きますね」  
映像魔石は壊れた。

船の中でも安心できない

風を切り裂き進む魔導船イージスは目的地に向かって飛び続けている。

その姿はまるで鳳凰のようにも迦楼羅天にも見えるくらいとても神々しく美しい。

そしてイージスが通った跡には七色に輝く魔紛が空に舞っていてそれもまた美しい。

それを見た農民は

「ありや、奇跡の風景だなあ」

誰もがそう思うくらいとても奇麗。

… イージス艦内…

館長室から二人の声が飛び交う。

「ちよつと、スピード落ちてるのじゃ!!」

学長もとい艦長のホワイトのかわいい罵声が無線を通じて船員に轟く。

「すみません、いきなり魔力の数値が下がりました。すぐ、元に戻します」

慌てる船員はすぐさま魔力数値をもとに戻す。

「ええと、空気中のエレメントを抽出します」

その言葉と同時に外の外部装甲が開き、そこからエレメントを吸い出していく。

エレメントとは空気中に存在する魔力の根源。

それを生物は空気を吸うと同時にエレメントを魔力に変え体内の血液に溶け込ませて身体全体に行きわたらせる。

このエレメントを血液に溶け込ませるのを得意とする血液と得意としないものが存在する。

上から

α型：とてもよく溶け込ますことができる。最高級魔術師に多い

β型：α型に比べて劣るがよく溶け込ますことができる。高級魔術師に多い。

γ型：程よく溶け込込むことができ、世界中の人口の大半はこのγ型。

δ型：あまり溶け込めず、才能無しの刻印を押される。

そして極めて稀なケースが存在する。

それが『ε型』である。

このε型は存在自体が確認されず近年の魔術医療の発展により確認された。

この型は息をしなくともエレメントが身体全体の魔路に強制的に引き込まれそのおかげでこの型の持ち主は魔力がなくなる事がない。

だが世界で6人しか確認はされていないためとても貴重なのだ。

噂ではこの血液型は遥か昔の人類が持ってたときれる。

そもそも魔力とはエレメントから抽出したものののだが、そのエレメントはどこから出るのかと言うと魔力から出るのだ。

これを聞いて矛盾に気付く人は沢山いるだろう。

魔力を使うのにエレメントが必要なのにそのエレメントは魔力から出るなんて誰しもが疑問を持つ。

しかしよく考えてほしい。

最初の文に注目してほしい。

『アイジスが通った跡には七色に輝く魔紛が空に舞っていてそれもまた美しい』と書いてある。

これの七色に輝くこれこそがエレメントの元の魔紛である。

この魔紛が空気中に分散しそしてそこで魔術反応が起こり魔紛と魔紛が再結合してエレメントに戻る。

それ故、世界中の魔力はなくなるかとかがないのだ。

それと魔力には色が存在するのだがそれは後々紹介しよう。

「エレメントの抽出が完了しました」

船員の疲れた声で艦長に伝わる。

「じゃあ、早速ブーストをしてくれ」

「了解。魔力供給一部切り替え、マジックブースター起動」

後方の装甲が開きそこからマジックブースターが二基出てきた。  
物凄い静かに莫大な魔力をためる。

「魔力充填20%、30、45、60、90、100%。充填完了しました。いつでもブーストできます」

無線から聞こえた船員の声と同時にニヤリと笑う艦長。

艦内に放送が流れた。

それはブラックさんの声だった。

「間もなくブーストします。船員は直ちに防御魔法を使い、ショックに備えてください」

船員たちは、すぐさま詠唱をはじめ、防御の体制に入った。

それを聞いた空仙とマリは何もすることが出来ない。

「まあ、私たち耐えるか」

「そうですね、マスター」

二人は横になり楽な体制に入った。

そして艦長が無線に向かって大きな声で言う。

「ブーースト!!」

その瞬間物凄いGが二人を襲う。

船員は防御魔法を使い耐えたが二人は唯々横になっているだけなのでGの掛かり具合はまったく違う。

船員たちが耐えてる中、ゲストルームから平然と歩いて出てくる二人。

「いやー、あまり大したことないね」

「そうですね、マスター」

平然と廊下を歩く二人をみて船員は。

「なんなんだ、あいつら。こんなにGがかかってんのにどんな魔法を使っただんな平然と歩けるんだ」

苦しそうに言う。

そんな思いもつゆ知らず二人は艦長室に向かう。

… 数分後…

二人は迷っていた。

「迷いましたね、マスター」

「う・うん」

今いる位置すら分からない状態である。

歩いていて気付かなかったがブーストは終わっていた。

近くに船員をみつけ艦長室に連れて行ってもらった。

「いやあ、本当に良かった。もしかしたら一生このまま迷い続けると  
思い焦っていたんですよ」

空仙が安心した声で船員に話しかける。

「いいんですよ、困っていたら助けるのが当たり前なので… それよ  
りもあなたの方が使った魔法は何ですか？」

船員が二人に質問をする。

「魔法？… 私たちは唯々耐えてただけですが…」

マリがとても困ったような顔をして答える。

その答えに船員は目を丸くさせまた質問を二人に投げかける。

「だったら、おかしいですよ。このGは防御魔法レベル3まであげて  
展開させないとペちゃんこになっちゃうくらい強力なんですよ」

とても大きい声でマリの答えに反論を加える。

ここで『防御魔法レベル3』について説明しておこう。

このレベルと言うのは魔法、魔術の威力、魔力量を表します。

まず上から0～6までであるがその上もあると言う噂。

レベル0：ほぼ害は無く魔力もあまり使わない。

レベル1：少量の魔力を使い、相手に攻撃できるくらい。

レベル2：レベル1と同じだが魔力をもう少し使う。

レベル3：魔力を中量を使い、あらゆる魔法の平均値である。

レベル4：高級魔術師から必要とされる魔力レベル基準。

レベル5：超絶魔法や極大魔術に使用されここまで来るのには才能  
と実力が必要。

レベル6：国一つを消滅させる最終魔法（終焉魔法）何千人もの人  
の魔力が必要で世界でここまでのレベルを発生させたのはまだない。

これがレベルの事だが6はほぼ使うことがないので省いてほしい。  
では物語に戻ろう。